天使と悪魔

とりまる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天使と悪魔

【Ｎコード】
Ｎ９９５９Ｇ

【作者名】
とりまる

【あらすじ】
聖戦と呼ばれる世界規模の戦争が終結してから５年。イベルクル王国特殊部隊『百合』の第一部隊隊長、ララは、上司からの命令である田舎町に向かう。そこで出会った少女、アリアはなんと世界を滅ぼす運命の少女だった

プロローグ（前書き）

最初っから凄くカオスかもしれません

プロローグ

今から数世紀前、ある小さな田舎で『空の予言書』という本が発見された。
その本には世界の破滅への歴史が細々と書かれていた。
当時の科学者は誰一人としてそれを信用しなかった。
けれども。
それから数百年がたったある日、世界を巻き込んだ巨大な戦争が起きる。

『聖戦』

人々は言う。
一体誰がこんな名前をつけたのだろう。
人々は言う。
何故、あんな惨い戦争に「聖」などつけた。
誰が何のために起こしたなんて、もう誰も知らない。
そして、今年の5月19日で終戦から5年がたつ。

ルキ暦1706年5月2日
イベルクル王国宮殿前大広場

『女王陛下万歳！』
『女王陛下万歳！』

世界一巨大な帝国とされるイベルクル王国にて、新たな女王を祝う

祭りが行われていた。
「見てください。人々が皆、貴女の女王就任を祝っております」
「あら本当。素敵ね、リリィ」
「女王、さぁ、お手を」
「ありがとう、レン」
女王と呼ばれたその少女は、眼鏡をかけた男性に手を引かれ、カーテンの幕を開ける。
と同時に、人々の歓声が彼女を包む。

『女王陛下万歳！』
『女王陛下万歳！』

「うふふ。これが私の国なのね。何て素敵なのかしら」
「そうですね。女王陛下」
「そうですな。女王陛下」
「あらあら。昔みたいに『姫さん』って呼んではくれないのかしら？」
「ふふ・・・。それは無理ですね」
「そうなの？それは残念だわぁ・・・。・・・これからもよろしくね？女王直属軍のお二人さん！」
「・・・ハッ。女王直属特殊部隊、『鷹』の名にかけ、貴女を未来永劫お守りします」
「・・・女王直属特殊部隊、『百合』の名にかけ、貴女をいつまでも・・・」
「うふふ。頼もしい限りだこと」
女王は、にこやかな笑みを二人に向けると、再び視線を民に戻した。
「これからどんな素敵な事が起きるのかしら！」
女王は、笑みを浮かべながら、そう言った・・・。

カツン　カツン
広い廊下を、黒い髪を地面まで垂らした神秘的な女性、リリィが歩く。
「リリィ」
そんな彼女を、銀髪の女性が呼び止める。
「・・・何だ、シルク」
「発見したわ。例のアレ」
「・・・そうか。では、ただちに・・・第一部隊隊長、ララを向かわせろ」
「・・・彼女明日休みじゃなかった？」
「じゃあその休みの時でいい」
「・・・ほんっと、鬼みたいな人」

プロローグ（後書き）

プロローグから主人公が出てこなかった

第1話　ララの憂鬱（前書き）

ようやく主人公登場

第1話　ララの憂鬱

「へ？仕事？」
『ね？お願い』
「はっはっは・・・・・・。ざっけんなあのクソ野郎がぁ！！！」

イベルクル王国女王就任から翌日。
王国内の小さな喫茶店で一人の女性の絶叫がこだました。
「アイツ絶対私の休みの時を狙ってるだろ！」
『そんな事・・・・・・・・・・・・ないわ』
「なんだその間は！」
『とにかく、頼んだからね！』
ブツッ　ツーツーツー
「・・・・・・」
恨み殺してやる、と彼女は呟く。
女王直属特殊部隊『百合』第一部隊隊長である彼女、ララは、一ヶ月ぶりの休みに、体をじっくり休ませていたにも関わらず、仕事を持ち込んできた上司に殺意を覚えていた。
無論殺せるわけないのだが。
「しかし・・・どこだよルキルの村って・・・。ンなモン存在してんのか？オイ、そこの」
「わ、私ですか・・・？」
「ルキル村ってどこ？」
「ええと、ここから西にずっと進んだ場所に・・・。片道2時間ぐらいかと」
「はぁっ！？・・・あのリリィのクソ野郎がぁ・・・。覚えていやがれ・・・」
物騒なセリフを口ずさむと、ララはバイクの鍵を手に取る。
「片道2時間・・・か。さて、どんな仕事なのかなっと。くだらね

ぇ仕事だったらぶっ飛ばしてやる」
・・・無論ぶっ飛ばす前に彼女がぶっ飛ばされるのだが・・・。
ドルルルル
バイクのエンジン音を大きくならし、ララは西の方に向かう。
時計を見ると、すでに午後４時をさしていた。
「コイツは一日じゃ無理だな。・・・泊めて貰うかなっと・・・・おわっ！？」
ガッシャンドッゴン
ブレーキをかけ損ねたララは、派手に丘を転がっていった。
「痛ぇ・・・」
「大丈夫ですか？」
突如上から声がした。
その声に反応したララは、すぐさま戦闘態勢をとる。
「誰だ！」
「あ、あ、あの・・・」

目の前に居たのは、長い髪の少女だった。

第1話　ララの憂鬱（後書き）

次回、この少女の正体が明らかになるのかは知らない

第2話　D157

「ケガ・・・はありませんか？」
「・・・ないが」
突如現れた少女に、驚きを隠せないララ。
戦争時のクセか、つい殺気を出してしまう。
「あ、あの・・・ええっと・・・ここ、どこか知りませんか？」
「ほぇ？お前も知らないの？」
「じゃあ貴女は・・・」
「私も知らないけどよぉ」
「・・・・・・・・・」
沈黙が流れる。
ララは正直、しまった、と思った。
彼女自身、見知らぬ人と戯れるほどの心も持ち合わせていないし、
第一仕事だってある。
この状況を何とか抜け出せないものか。
そう思っていた矢先のこと。

ブルルルル

携帯がなり始めた。
「ん・・・。もしもし。リリィ・・・様？」
『どこで油を売っている』
「いや・・・。実は今女の子と喋っていて・・・」
『いつからレズ専になった？月読のような奴だな』
殺してやろうか、とララは（心の中で）呟いた。
『で？女の名前は？』
「へ？あ、ああ。ええと、お前、名前は？」
「え？知らないですわ」

「・・・・・・・・・・・・・は？」
知らない、とはどういう事だ。とララは聞き返した。
「私には名前が無いのです。生まれた時から・・・ずっと。・・・・D157と呼ばれていた事だけは・・・」
「・・・だとよ」
『むぅ・・・』
リリィは急に黙り込む。
そして
『よし、任務変更だララ。彼女をこっちに連れて帰れ』
「は？」
『命令だ。・・・・・・・・・・・・わかったな？』
最後の「わかったな？」には、リリィ特有の『殺気』が込められていた。
「・・・わかりましたっよ・・・。しっかなねぇなぁ・・・。つー事で、お前、私と一緒に来い」
「ほぇ？」
まぁ普通はそんな事言われたら驚くだろう。
例え記憶をなくしていても。
「・・・いいから来い。ウチの上司からの命令だ。アイツの命令逆らうと怖ぇぞ」
ララは少女の腕を引っ張る。
そして気がついた。
「ゑ・・・お前・・・全・・・裸・・・？」
少女、D157は、一糸纏わぬ姿だった。
「そんな姿で出歩くなぁあああああ！！！！」
「ひっ！ご、ごめんなさい・・・」
「いいいいから！ななななんか服・・・」
それにしてもこの第一部隊長、男でもないくせに動揺しすぎだろう。

ララは何かに憑かれたかの様に、「服服服・・・」と唱えているのだった。

第2話　Ｄ１５７（後書き）

何故か段々へたくそになっていく不思議

次回は・・・ララがＤ１５７の名前を決めるシーンにしようかなぁ・・・

第3話　バイクの上で（前書き）

若干百合要素有り

第3話　バイクの上で

「あの、服、ありがとうございます・・・」
「・・・いや・・・」
アノ後、ララは自分の持ち物の中にロングコートがあったのを思い出し、それをD157に羽織った。
そして今彼女らはバイクに乗り、『百合』本部に向かっている。
余談だが、このイベルクル王国はバイク無しの二人乗りは禁止である。
「何で裸であんなトコに？」
「あ、あの、目覚めたら・・・変な、真っ白なお部屋にいて・・・」
「で・・・？」
「で・・・・・外に出て・・・」
「ずっとあの格好で・・・？」
「は、はい」
誰かに見られなかったか心配になる。とララは思う。
D157は、見た目こそ幼いものの、顔つきはいわゆる美少女だった。
そんな彼女が裸でたっていたら、健全な男ならまず『食べたい』と思うだろう。
・・・一部の女性もそう思うだろうが。
「・・・お前、家は？」
「・・・ないです」
「家族は？」
「・・・知らないです」
「・・・お前、『聖戦兵器』か？」
「・・・なんですの、ソレ」
「いや知らないなら別に構わない」
聖戦兵器。

それは聖戦の時に作られた『兵器生物』の事。
その被験者のほとんどが、女性、そして当時子供だった人間である。
ララを含んだ、百合の人間のほとんどがその聖戦兵器だった。
「・・・・・・・・・・・風が気持ちいいですわ」
「・・・はっ。そうかい。私はもうそんな事・・・感じられないがな」
「・・・そんな事ありませんわ。貴女は・・素敵ですもの」
「は？」
「貴女は見知らぬ私に、服をくれるという素敵な事をなさったもの」
「いや・・・それは・・・」
ララはむず痒い気分になる。
「あああ、ホラ、しっかり私に捕まってろよ。とばすから！アイツ時間に厳しいんだよな～」
「ふふっ。そうですか。ではむぎゅっと」
「ちょ、そこ・・・胸なんだが・・・」

第3話　バイクの上で（後書き）

・・・名前の部分が無かった。

次回こそ・・・！

第４話　百合のアジト

長い長い道を、ララと少女、Ｄ１５７はバイクで進む。
ララは途中何度もＤ１５７に「寒くないか？」などと聞くが、Ｄ１５７は何も答えない。
そうして進むこと数時間。ようやく女王の住む城が見えてきた。
するとララは城にはいかず、そのまま近くにある小屋の中にバイクを入れた。
「・・・ここには何もありませんけど？」
「いや、そうじゃねぇ」
そう言うとララはポケットからカードを取り出し、小屋の壁にかけてあった絵の額縁に差し込んだ。
「？？？」
そして今だ状況の読めないＤ１５７（当然だが）。
すると、突然額縁から七色の光が現れた。
「ホラ、行くぞ」
「え・・・でも・・・」
「大丈夫だって！イグルクルの科学力を舐めんな！」
Ｄ１５７はララに腕をつかまれたまま、その光の中に入っていった。
「ん・・・ここは・・・」
そして彼女がみた物は・・・。
「だぁれ？その子」
ゴシック系の服に身を包んだ短い髪の少女だった。
「きゃああ！！」
「オラセフィル。驚かせんな」
「ごめんごめん。で、本当に誰この子」
指さすな、とララはセフィルと呼ばれた少女の手をはたく。
「今から上司んトコ行くんだよ」
「へぇ～。じゃあボクも行く！！」

「くるな」
そうは言うものの、セフィルはララの後ろをちょこちょこついてくる。
「・・・あの・・・ここ・・・」
「ここは私ら王国防衛特殊部隊、百合のアジトだよ」
「王国・・・？」
「女王直属特殊部隊って言った方がわかりやすいかな」
「いえさっぱりわかりませんわ」
「・・・・・・」
ララとD157は宮殿のようなアジト内部を早歩きで進んでいく。
ずっと、ずぅっと。
「そろそろつくと思うぜ」
「ここが『上司』のお部屋ですの・・・？」
「そう！ここにボク達『百合』のリーダーであり、世界最強の剣士がいるんだ！」
「じゃあ入ろうぜ。リリィ様、今帰りました」
ギギギ・・・と音を立て、その大きな扉はゆっくりと開く。
「おかえり、ララ」
「・・・この方が・・・リリィ様・・・？」
中にいたのは、忍装束を着た、美しい女性だった。

第４話　百合のアジト（後書き）

次、次こそは・・・！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9959g/

天使と悪魔

2010年10月10日00時24分発行